

9/19
下朝日

民意との亀裂を恐れよ

論説主幹

大野 博人

安保関連法案で問われているのは、国会と国会議員でもある。ほんとうに人々を代表しているか――。

高まる異議申し立ての声と、それにもかかわらず参議院での採決、可決へと進むとするとする国会。議員はその亀裂の大きさに恐れを抱くべきだ。

安倍晋三首相は「国会において長い時間をかけ審議を行ってきた」という。

衆議院と参議院を合わせて200時間を超える。

たしかに長い。そのおかげで、議論は議会の外にも大きく広がった。

そして、議会内外の議論は多くの疑問点を浮き上がらせた。集団的自衛権の憲法問題に始まり、存立危機事態の意味、想定する国際情勢認識のあいまいさ。

活発化した議論を受け

て、憲法や安全保障の専門家、文化人たちが相次いで考えを明らかにした。また、あまり前例のない数の市民が街頭に繰り出して意見を示した。議会の外では、多くの人々が熟考し自分の考えを持ち表明するようになった。

では、国会はどう変わったか。

200時間以上の審議で問題は明らかになった。し

かし、採決を審議の前に行うと後にやろうと結果は同じ。だとしたら、なんのための審議か。

熟していった民意と停滞する国会。人々がいらだっているのは、審議を尽くさない議会というより、審議を重ねても変わらない議会に対してではないか。

安保関連法案は、戦後70年を経て、日本という国の根本を変えようとするもの

である。だからこそたくさんの方が声を政治に届けようとした。だが、党派別の議席数はこの問題が争点にならなかつた選挙の結果であらかじめ決まっていた結論が動かない。

政党政治とはそういうものと割り切るべきなのか。

しかし、人々は政治に拒まれたと感じるだろう。それで政治への失望感が広まれば政党政治と議会制民主主義そのものへの信頼がむしばまれていく。

15日、参院特別委員会の中央公聴会で発言した学生

団体「SEALDs（シー ルズ）」の奥田愛基さんは「一人一人」や「個人として」という言葉を繰り返した。人々の声を党派的な数として見ないでほしい、また議員にもただの数にならないでほしい、というメッセージだろう。

安倍首相は、法案の必要性について引き続き国民の理解を求めていくという。しかし今、国会議員がしなければならぬのは、政府といつしよになつて国民に理解を求めることより、国民を理解することだ。

国民を理解することだ。